

**A Little Darkness**

小さな闇

---

**Yoshimoto Banana**

*Translated by Michael Emmerich*

輸入業を営む父親の仕事にくつついてブエノスアイレスに来たものの、なんの知識もなかったのとまどうばかりだった。街が白人ばかりなのも、街並があまりにもヨーロッパに似ているのも、それなのにくつきりと濃い、南米特有の悲しいほど青い空に、ジャガランダの木が枝を伸ばしているのも、新鮮だった。

2 街を行く女の子たちはみんな妙に老けていて、二十一歳の私なんてまるで中学生に見えるのだろう。ひとりで歩いていてもナンパもされず、スリにもあわなかつた。ホテルのレストランがいやがるほどの古いジーンズに、懸賞で当たった古い古いスラムダンクTシャツを着ていたのがよかつたのかもしれない。そこにGジャンをおれば、どこから見ても貧乏な旅行者だった。その上、ひとりで歩くなら用心しすぎてもいいくらいだ、と父が言ったので、私は手ぶらで歩いていった。

3 その日、父は私と別れてひとりでそそくさとギターを買いに行ってしまった。父はクラシックギターが趣味で、演奏はプロ級だった。父はこの国に、観光に来たのでも、本当を言うとお出張で来たのでもなく、ただ単に、ギターを買いに来たのだった。取り引きをまとめる仕事は昨日で終わり、父は朝からうきうきして朝食の間もギター屋のことで頭がいっぱいだった。はじめは私もその小さな店に入って、本当に美しいギターが並んでいるのを見ていた。人が手をかけて、心を込めて作り、磨きあげ、やがて演奏することによってまた生命の輝きを深めていく楽器というもの……そこには目的のある美しさがあった。父の目は輝き、次々に手にとつて演奏しては、決められないため息をもらしていた。すばらしすぎて、選べないという様子だった。きっと彼は一日中ここにいらだろう、と思ひ、ホテルで集合することにして、私は店を出た。

dad,  
city  
etched  
clear  
looked  
must have  
or rob  
wearing  
at the  
t I had  
ble, it  
get  
alone,  
enough  
even,  
He had  
zy all  
ff the  
op and  
al  
y  
ould  
ine.  
yes  
his  
im back

4 来る前にマドンナの映画を観て予習した私は、エビータのお墓でも見てみようか、と思い、コレクティールに乗って、レコレータ地区にある墓地を目指した。

墓地は公園かと思うくらい緑が多かった。たくさんの方が犬の散歩をしていた。ひとりで何十匹もの犬を散歩させている人もいた。きつとそういう仕事があるのだろう。聖堂があり、高い塔がそびえていた。私は墓地に入ってしまった。

5 そこは、私の思っていたような墓地とは全然違って異様に立派な建物が並んでいる場所だった。ひとつひとつの墓が一軒の建物になっていて、高くそびえていた。これはもはや住宅街だ、と私は思った。広い通路の両脇に、ずらりと家のようなものが並んでほかに続いていく。納骨堂は何人でも入れるくらい大きい。死んだ人たちが入っている家、また家。天使や人物やキリスト様やマリア様の彫像がそれらを彩っている。小さい教会がついてる墓も、ガラス張りで自動ドアの納骨堂がついた墓もあった。中には美しい棺桶が段になって置かれていた。中に階段があつて地下に降りて行ける墓もあった。エビータの墓は確かに今も絶えず人々が訪れるだけあつて新鮮で美しい花がたくさん飾られていたが、墓地全体の豪華な、まるで美術館のような様子に比べて、それほどインパクトはなかった。静かな午後、静まり返る死者の家たち……その様子はちょうど、昔両親が行つた、ポンペイの遺跡を思い出させた。街はそのままなのに、住んでいる人たちが消え失せたあの静寂。今も当時の活気が匂いのように漂っている石の街。青空を背景に、いつまでも死んだまま静かにしている街。

6 ずらりと並ぶその墓の街の装飾された建物は、どれもが母のお墓が五十くらい入りそうな墓ばかりだった。そう、母の墓は本当に小さくて、日本の墓地の中でもさらに見つけることが困難なくらいかわいらしいもの

1 for our  
 2 he  
 3 or the  
 4 I like a  
 5 th their  
 6 t be his  
 7 it into  
 8 s  
 9 ing.  
 10 tery  
 11 od on  
 12 he  
 13 ot just  
 14 ome had  
 15 ore that  
 16 n. ers,  
 17 ound.  
 18 a  
 19 ave itself  
 20 nlike  
 21 for the  
 22 I going  
 23 that city,  
 24 le who  
 25 / with an  
 26 ue sky.  
 27 dless  
 28 's  
 29 modest

だった。

かつこいい。私がお金持ちになったら、母にこんなすごいお墓を作ってあげようか、と私は思ったが、すぐにその気持ちは消えた。

そうだ、母はこういう小さい家に入ることがなによりもいやだった、と思い出したからだ。

死んでいる人のほうが多いこの場所では、死者を思い出すことが妙に自然だった。角を曲がっても曲がっても、同じような美しい装飾や花に彩られた「墓の街」が続く。光に照らされて陰影がくつきりとして、夢の中を歩いているようだった。ここをいつまでも歩き回っていたら、自然に、死者の国と境がなくなり、足を踏み入れることができそうだと思った。

7 母は三年前、癌で死んだ。私はひとりっ子でお母さんっ子だったから、ずいぶん長い間悲しみにくれて、高校を卒業しそこない、人よりも長く高校時代を送ってしまった。バスケットボール部の後輩たちが同学年になり、私はなぜか先輩！ とよばれる同学年になったため、あだ名は先輩、になってしまった。卒業の時は、後輩からも同級生からも、先輩、卒業おめでとうございます！ と言われて愉快だった。その頃には母が残っていた薄くて柔らかい気配も家からすっかり消え、がさつな父と私の気ままな生活の型ができていた。母はこの世からひっそりと消えていった。

8 母はなんとなく影の薄い人で、小さい頃から、もしかしたらお母さんは長生きしないかもしれないなど私は思っていた。母は欲望をむき出しにすることをせず、大声で笑うこともあまりなく、なにかをあきらめているよ

her  
tle  
the  
s I  
ings, The  
a  
ugh, the  
t  
ld, and  
I didn't  
usual.  
r behind  
e as  
e my  
veryone,  
tions,  
in the  
my  
l. She  
ren  
long. She  
she

うなところがあつた。私はそれは父のあまり盛り上がり過ぎたおとなしい性格の影響かと思つていたが、母はずつとそんな感じだつた、とお葬式に来た昔の友達はみんなそう言つた。ああしたい、こうしたい、というのが薄く、いつもなんとなく受け身な感じがする人だつたと。

9 母の母、つまり祖母は、パリに住んでゐる有名な画家の愛人だつた。母は、私生児だつた。祖父は年に三ヶ月くらいは日本に住み、祖母はその間の現地妻だつたそうだ。どちらももう死んでしまつたので私は祖母にも祖父にも会つたことはないが、たまに展覧会が来ると行き、「ほほう」と思う。血がつながつてゐるんだ、と不思議に思う。私の好きな浅葱色を多用してゐるその絵を見ると、そう思う。祖母の肖像もある。目元が母に似てゐるから、買いたいと思つたら、法外な値段だつた。

10 祖父は老境にさしかかつてから突然恋に狂い、正妻も祖母も投げ出して、二十代の娘と結婚した。正妻がどうなつたかは知らないが、祖母は精神に異常をきたした。すべてを失つた祖母の、その時の嘆きようはものすごかつたらしい。

母は、その話をする時だけは、奇妙に熱を込めた。

私はいつも、影が薄い母がふと消えてしまふのではないかと不安だつたが、その話をしてゐる時の母は、なぜか力強かつた。

11 時計を見ると、午後三時にならうとしていた。

lways  
died  
met her  
e that.  
assive.

a  
gitimate  
r in  
e and  
I would  
rought  
How  
them. I  
use of  
anted to  
e

with  
er to  
his  
ever

ry.

se she  
at

墓の中は陽ざしもきつく、私はゆっくりと歩いて、またエビータの墓の脇を通り、そこに飾られた様々な献辞や、黒いみかげ石の光るところを見た。そして、少し休むためにとても大きな木の根元に腰を下ろした。かすかに風が渡っていつて汗が乾いた。墓場にはどうしていつも、低く枝を伸ばす大きな木があるのだろうか？ 死者を慰めるためなのか、死者のエネルギーを吸い取って育つのか。

12 父はまだギターを選んでいるだろうか。

気のいい父、クラシックギターがこの世でいちばん好きな父。

父と母は新婚旅行でやはりここに来たという。その時も父はギターを買った。母は、ひとつひとつの試し弾きに耳を傾け、根気よく、父の買い物につきあった、と父は言った。そして、お母さんは、あるひとつのギターを指差して、あなたの音はこれ、と言ったんだ、それがうちにあるこのギターだよ。お母さんにはそういうミステリアスなところがあつて、そこにすつかりやられてしまったんだね、俺は……と父はのろけたものだった。

13 母は父と基本的にとでも仲が良かったが、父には私から見ても奇妙なところがあった。私は父方の祖父母をよく知っているが、特に変わったところはなさそうなので、それは父が独自に持っている癖のようなものなのだと思う。小さい頃からそうだった。

14 たたとえば、父の誕生日、母は父の好きな食べ物朝から用意している。父は、必ず早く帰るし、遅くなるようだったら連絡をする、と言う。私もそれを心得て、部活が終わるとすばやく帰ってきた。しかし、ある程度で分別がつく年齢になった頃にはもうわかっていた。そういう時、必ず父は酔って遅く帰ってくる。連絡もしない。それが母や私の誕生日だったら別だった。早引けしても病欠してでも、父は家にいた。しかし父の昇進の時

wn  
at all  
nite.  
ous  
lways  
he  
v so  
r.  
in  
ight a  
he said,  
d then  
guitar I  
de to  
he  
i close  
nothing  
ly his  
pared  
My  
ll if it  
I was  
en I  
ons, my  
ver  
ver  
in

も、独立の時も、親友が事故で亡くなつてがっかりしている父を慰める会の時でさえ、いつもなにか父を中心に、父を待つて食事をしようとする、父は逃げ出した。親戚とかお客さんを呼んだりすると、ますますだめだった。結局父なしで食事をして、お客さんが帰った後に、つぶれて運ばれてくる父を見るのがおちだった。

15 幼い時から母が死ぬまで、母も私も何回父を責めただろう。父は悲しそうに言った。

「どうしても、待たれていると思うと、こわくなつてしまふんだ。自分でもどうしようもないんだ。そして、足が重くなつて、遅くなつてしまふ。そうするとますます連絡しづらくなつて、飲んでしまふんだ。もしも期待に応えられなかつたら、と思うだけで、だめなんだ。」

16 これは、心の病かもしれない、と思い、私と母はやがてじよじよにだが公にする祝い事をとりやめていった。きつとそれは父の深いところにある傷に触れるなにかなのだろう。それにしてもよくそれで独立して事業をはじめめることができるものだ、と私は思ったが、外で無理すればするだけ、できてしまふほころびがそのポイントだったのだろう。

17 それでも私と母は、創意工夫をして、意地でも祝つたりした。

誕生日の前夜には父が寝静まつてからこつそりと支度をして、プレゼントをテーブルに並べて、音もなく調理をして、夜中の二時に父を叩き起こし、みんなでパジャマを着たまま乾杯をしたこともあった。そういう時、その創意工夫に父は本当に救われたと思う。そして誕生日当日は寝ぼけて会社に行き、普通に帰つてきて、普通の夕食を食べていた。そんなにしてまで、とは思わなかつた。それが愛情の示し方であつたり、人間の弱さという

from  
We  
had left  
ends or  
that?  
nom  
f you  
then  
it's  
so  
ons for  
d  
h ad  
n like  
hed  
to  
as  
Then,  
is  
ally  
to  
and  
t if  
ate.  
n

ものだと思った。

18

私が母にその話を聞いたことは二回しかない。

一度は、小学生の時だった。その頃はまだ私も母も、父の悪い癖を矯正しようとしていた。なんの祝い事だっただろう。父が夏休みに海外旅行に行こうと言い出したので、そのお礼にごちそうを作ろうという日だっただろうか。

母はよりによって天ぷらを用意し、じっと待っていた。私は耐えきれず、だいたいどうせいつものように父は帰らないだろうと知っていたので、勝手にカップ麺を作ってとりあえず食べていた。母にもひとくちあげた。母は麺をすすり、ひとこと言った。

「他に女の人がいるとかいうほうが、よほど深刻よね。」

「そうよ。お父さんはまじめすぎるから、こういうかしまった場が家にあるのがだめなのよ。」

「でもね、こうして、用意をして、天ぷら鍋にも油を入れて、材料もみんなそろえて、ないはずの夕食の時間を待っているよね、お母さん、箱に入っている感じがするの。」

「はあ。」

私は言った。わけがわからない比喻だと思った。「この感じは、きつと、今、お父さんが外にいる気持ちと似ていると思うの。そういうところがお互いにひかれ

ly  
lad's. I  
as the  
on,

gotten  
ting. I  
ver  
cup of

orse if

ing

gs  
going  
e're

r feels  
aybe



合あったのかもしれない、と思うと、たまらなくなるの。お互いのたまらなくつらいところで、向むき合あっているよ  
うな気がしてくるのね。そうすると、ふだん積み上げてきた明あるいものや、地面じめんに足の着ついたものがみんな幻げん想そう  
に思おもえてきて、ずっと箱の中なかにいたような気がする。好きだから、大切たいせつだから、箱の中なかに入れられてしまっ  
るような気がする。完璧かんぺきなお父おとうさんになるのがこわいっていう心が、お父おとうさんの中なかになぜあるのか？ いや、誰だれ  
の中なかにもあると思う。それがこわいの。」

「いいじゃん、私わたしがいるじゃん。二人ふたりで箱はこに入いっていても、私わたしはそこに入いってないもの。無駄むだだよ、来こないもの  
待まちっていて。それより私わたしのために天あまぶら揚あげてよ。冷ひえたやつをいやみがましくとっておいて、先さきに寝ねてしま  
えばいいじゃない。お父おとうさんもそのほうがいつそやりやすいと思うよ。」  
私わたしは言いった。

母はははにっこり笑わって、私わたしのために天あまぶらを揚あげはじめしてくれた。

19 その夜よる以来いらい、母ははは意い地ぢで待まちとうとはしなくなつた。もちろん待まちちはしたが、少すこしずつ、先まに作つくって食くべている  
ようになつた。私わたしは私わたしで、私わたしが生うまれる前まえの息いき苦くるしい二人ふたりを想そう像ざうした。愛あいの熱あつに苦くるしむ男おとこ女めの姿すがたを見みた気がした。  
20 箱はこについては別べつの時ときにわかつた。

ある時とき、私わたしと母ははは青山あおやまに買かい物ものに行いき、私わたしの希き望ぼうでススパイラパイルビルルに展てん覧らん会かいを見みに寄よつた。外がい国こくのアーチススト  
が、小こさな建た物ぶつを作つくって展てん示じしていた。見みに來きた人ひとは、その色いろとりどりの窓まどがある小こさな建た物ぶつにかがんで入いって、  
中なかから外そとを眺ながめることができるようになっていた。

入いらう、と私わたしが言いうと、母ははは外そとで待まちっていると言いつた。

se  
the

in a  
's not  
ld  
et back  
way."

, I  
was an  
ould  
rful  
de.

「なんで、内装が見どころなんだよ、入ろうよ、と私はしつこく誘ったが、母は待っている、と言った。おかしい……と私は思った。その時の母は、家に帰れない話をしている時の父と同じ目をしていた。本当にこの人たちは心の傷をポイントに深く分かちがたく結ばれているのかもしれない、と思った。」

2) 私はその小さな建物、ちようどこの墓地に立ち並ぶお墓くらしいの大きさだった……に入り、いろいろな窓から外を見たり、小さな家具や飾られている絵を見て、楽しんだ。そして、外に出た。母はにこにこして、もとの母に戻って待っていた。

「疲れたから、お茶でも飲みましょう。」

と私は言つて、スパイラルの値段が高いカフェに母を誘つた。

一杯のコーヒーを嬉しそうに、おいしそうに貴重なもののように飲み終えた後、やはり母は切り出した。母はそういう人だった。曖昧にすることを好まなかった。そして、母はなにかを口に入れる時、いつもそんなふうはこの世の最後に飲み食いするもののように楽しそうにした。私はいつもそれを切なく思った。

「さつき、変に思ったでしょう？ お母さんのこと。」

母は言つた。

「お母さん、箱に入るのがこわいの？昔なにかあったの？」

私は言つた。

「今まで言わなかったけれど、あなたのおばあちゃんは、病気になるって、病院に入ったことは知っているわね。おばあちゃんは、自殺したの。精神病院だったから、刃物はなかったのに、えんぴつ削りの刃を取り出して、

手首を切ったの。すごく器用な人だったから。」

私はそんなこと知らなかった。失意のうちに死んだというのは知っていたが、それは親戚の誰からも聞かされていなかった。

「お母さんがいくつの時？」

私はたずねた。

「八歳の時よ。」

母は淡々と言った。

23

「お母さんは、おばあちゃんがおかしくなった時、二人で暮らしていたの。もうおじいちゃんがその家に来ることとはなくなって、おばあちゃんはお母さんが学校に行くのも恐ろしくなったみたいだった。ある日、学校から帰ると、おばあちゃんは家の中に、段ボールで小さな家を、って言っても、さっきのあの家くらいの大きなものだったんだけど、とにかくそれを作って待っていた。窓がくり抜いてあって、中にはおもちゃのテーブルが置いてあって、ろうそくが灯っていたわ。壁紙もきちんと塗ってあって、中は花柄が描いてあった。絵心があつたら、とてもかわいらしい美しい紙のおうちだった。おばあちゃんは、お前のために家を建てたからここに住んでほしい、と泣いて頼んだ。私は、そうしてあげようと決めた。」

「ええ？」

「それから二週間、その家の中で私は暮らしたの。徹底的に、その中だけで。一歩も出なかった。おばあちゃんはおまるまで持ち込んで清潔を保って世話してくれだし、食事もまめに運んでくれた。陽の光は部屋の窓から、

as  
... but  
t crazy,  
ather  
was  
home,  
ilt out  
big as  
ndows,  
burning  
side was  
flair,  
he had  
... I  
nd kept  
er  
o the

その小さな家の窓にも射し込んできたわ。」

「お母さん、すごい根性だね。」

「それしかしてあげられることがなかったんだもの。お母さんの世話をしている時、おばあちゃんは本当に幸せそうだった。にこにこしていた。神々しかった。おじいちゃんが去ってから、ずっと泣いていたおばあちゃんを、喜ばせるにはそれしかなかったの。だって、お母さんにとっては、あんたのおじいちゃんは、たまにしか来ないよく知らない人だったから、おばあちゃんがすべてだったのね。」

「はあ……。」

「私が学校に行かなかったから、教師が様子を見に来て、私は保護され、おばあちゃんは病院に行った。後はあなたも知っているとおおり、お母さんはおばさんのところに引き取られて育ったのよ。」

「それって、言葉につくせない体験だったんだろうね。」

24

「今も、時々あの家の中で目覚める夢を見ることがある。体を丸めて、がさがさした段ボールの感触を感じて、小さな窓から細く陽が入ってきて、おばあちゃんの、私のお母さんが描いた紫の花柄を照らし、絵の具の匂いがして、それから、味噌汁の匂い。おばあちゃんの立てる楽しそうな、活気のある物音。おじいちゃんが来るのを待っていた時のようだった。そして、私はそこから、出ようとしても出ることができない。出てしまつて、金切り声でおばあちゃんが泣くのがこわかった。私はその中で一日中、じっとしている。体を丸めて、じっと……。今日はお出ることができのかな、と思ひながら目覚めて、そして、ここを出る時はおばあちゃんと別れる

happy  
rt of

her up.  
every  
ne.”

ow up at  
her was  
ny aunt,

at house.  
, a thin  
hining on  
i. d. I  
rant  
lt like  
ive, even  
r  
nything.  
if I'd be  
that when

時だつて、どこかで知っていたわ。行き場がない気持ちだった。そつと出て、パリのおじいちゃんに電話しよう、と思ったこともあった。でもそれは、自分からおばあちゃんと別れることになる、つてお母さんは思ったの。死んでもいい、とことんつきあつてやる、と決めたの。」

25 母の性格の秘密を私はその時知つた。母の一部は今もその家の中にいるんだろうということも。

「だから、お父さんが帰つてこない時、お母さんの世界はあそこに帰つて行つてしまうことがある。この時間は永遠に続くという気がしてしまう。愛されているからわざとその時間の中に閉じ込められているというのはわかるけれど、苦しくてたまらなくなる。」

「お父さんにそのこと話した？」

私はたずねた。

「話してないわ。」

母は笑つた。

「話したくないのよ。」

「どうして？」

「弱味を知られたくないの、なんてね。」

母は言つた。母はこうと決めたらなんとしてでもやる人だった。結婚前に、そのことをなかつたことにしたの  
 だろう、と私は思った。死ぬまで、母はそれを父に言わなかつた。

other.  
out and  
mean  
l to stay

And I  
use.  
ind  
aiting,

ing.”  
isions. I  
ugh  
se,

26 そんなことを考えている間にも、午後の光は夕暮れの金色に向かつて、ゆっくりと熟していった。

私は木の下で、大きな葉をじつと見上げていた。木漏れ日が足元でおどり、美しいまだらを作っていた。何組もの恋人たちが腕を組んで通っていった。何匹かの犬が私のところにやってきては去っていった。外国にすることを忘れてしまいうくらい、静かな時間だった。

塔のてっぺんの十字架が陽を受けて光っていた。

もう少ししたら、ホテルに戻って父の買ったギターをほめてあげよう、演奏も聴いてあげよう。そして……。私は今夜食事をしている時、母の過去を父に話すだろうか？

と私は考えた。

27 やめよう、父が悲しんで後悔するだけだ、と私は思った。自分の中の小さな闇が、母の中の闇に呼応して苦しみ合ったことや愛し合ったことを悔いるだけだろう。

私にとってのそれはなんだろう？ 期待されると帰宅できない性分でもなく、箱がこわいわけでもない。でも、私の中からいつかそれは姿を現すだろう、と私は思った。それが成長していくということだ。私はそれとどう向き合うのだろうか？ どう対処するのだろうか？ 私はまだ若く、恐れを知らない。楽しみですらあった。見てみると思った。外から見たら大甘の平和すぎるほど平和だった私の家族の中に小さな深い闇があり、その闇はこの墓地にある静けさと同じくらい、歴史を秘めて豊潤なものだった。それは恥じるべきことではない。陽にさらさら光る葉に守られて、いつまでも私はそのことを考えていた。

ie  
The sun  
ming a  
ouples  
ae, then  
reign  
guitar  
1 sad,  
how the  
in her,  
li. some  
of boxes.  
growing  
h it? I'm  
o see for  
iculously  
sep  
f this  
nlight.